豊臣秀頼の作事体制について

A STUDY OF SAKUZI STRUCTURE OF TOYOTOMI HIDEYORI

木村 展子*

Nobuko KIMURA

Hideyori constructed a lot of temples and shrines. Investigation into munahuda and bokushomei of these temples and shrines makes clear the character of sakuzi structure of Hideyori. Among them, the forms of sakuzi projects are divided into two. One is carpenters and craftman dispatched by Toyotomi performed sakuzi(A), and the other is carpenters belonging each temples and local carpenters performed it as the main constituents(B), with the money and magistrates of Toyotomi. By examining the forms of sakuzi projects by Hideyori, it's found that form(A) was taken in many cases with active mobilization, but form(B) also existed widely. And the chief carpenter who generally direct the sakuzi project like Nakai Masakiyo did not exist. It suggests the limit of sakuzi structure of Hideyori and it is doubtful it worked entirely as an organization.

Keywords : carpenter, sakuzi, Toyotomi Hideyori, Momoyama era

大工、作事、豊臣秀頼、桃山時代

1. はじめに

安土城で天下普請が始まってのち、中井正清が自分の体制を大体確立する慶長十年(1605)頃までの約25年間は、座に代表される中世的な組織が崩壊し、町大工・門閥大工・新興大工などあらゆる大工の再編成が進められ、最終的には正清によって一元化される過程であった。

桃山時代¹⁾に造営された数多くの城郭・寺社の造営主体は主に徳川氏と豊臣氏である。徳川氏の作事組織については、幕藩体制確立以降の作事方はもちろんのこと、中井家に関しても、中井家文書により数多くの研究がある。一方、豊臣秀吉、秀頼親子が畿内にとどまらず多くの寺社を造営したことは有名であるが、秀吉が造営した建築物はほとんど現存していない。秀頼の造営した寺社は半数近くが現存しているが、秀吉、秀頼期を通じて造営文書の類は残っておらず、絶対的な1次史料の不足から作事編成などはわかっていない。現時点では、中井家のように体系的に豊臣氏の作事組織を解明することは不可能である。しかし、秀頼の造営寺社に関しては棟札や墨書銘などが発見されている。史料としての限界はあるが、棟札や墨書銘などを検討することにより、秀頼の作事体制の性格を明らかにしたい。

2. 秀頼の寺社造営における作事方式

豊臣秀頼の造営寺社について調査した結果、現在のところ橋梁を含めて90寺社が判明した²⁾。それらの寺社を概観すると、地域的には、山城と領国の摂河泉が最も多く、ついで大和、近江、その他、伊勢、熊野、出雲、尾張などの遠隔地にも存在する。時期的には慶長五年(1600)以降本格化し、慶長十三、四年を境に急激に減少する。

これら寺社の造営は多くの場合、当然、豊臣氏が奉行と大工、諸職人を派遣し作事を行っている。しかし、棟札や文書史料からは寺家大工や地元の大工の関与しか認められない場合もある。横田冬彦氏は、慶長期の寺社の作事を経営主体や寺家大工の関わり方から見て、寺院側の経営で寺家大工が行うものと、政権側が費用を下行して施主となり奉行を派遣するものがあり、さらに後者は寺家大工が行うものと派遣された大工が行うものがあることを明らかにしたが³⁾、秀頼の作事においても同様に、作事方式は二種類に大別できる。すなわち、豊臣氏が費用を下行し、奉行を派遣するが、大工や諸職人も派遣し作事を行う場合(A)と、寺家大工や地元の大工が主体となって作事を行う場合(B)である。秀頼の造営寺社における作事方式の別、担当奉行、大工等は表1ようになる。

まずB方式の作事について見ていくと、山城では、慶長十一年

* 神戸大学大学院文化科学研究科 大学院生・修士(文学)

Graduate Student, Graduate School of Humanities and Social Sciences, Kobe Univ., Master of Arts

表1 秀頼寺社造営における作事方式・奉行・大工

○豊臣方大工（請負の可能性あり） △寺社方大工 ×不明

地域	年	建築物名	方式	規模	工事	奉行1	奉行2	大工1	大工2	備考
山城	慶長4年	豊国廟	A	全棟	新築	前田玄以	木食成其			秀頼創建のためA方式
		石清水八幡宮若宮殿社	A	全棟	再建	大野治長				豊臣系大工の用いる船機が認められA方式と推測
		慶長5年	醍醐寺金堂	A	数棟	移築	前田玄以	木食成其	△醍醐与左衛門	△醍醐与三左衛門 他2名※1
	慶長5年	方広寺七重塔・講堂・廻廊	A	数棟	新築					秀吉創建のためA方式
		豊国廟樓門	A	全棟	移築					秀頼創建のためA方式
		慶長6年	法国寺	A	全棟	新築				秀頼創建のためA方式
	慶長7年	清凉寺釈迦堂	不明	1棟	再建					
	慶長8年	救光院本堂	不明	1棟	再建					
	慶長9年	東寺金堂	B	数棟	再建	片桐且元	勢登	△藤井□□吉□※2		
		豊華院	不明	不明	再建					
		慶長10年	金戒光明寺阿弥陀堂	不明	数棟	再建	宮城豊盛			
	慶長10年	東寺南大門	不明	数棟	再建		勢登			
		石清水八幡宮大塔	不明	全棟	再建					
		相国寺法堂・鐘樓	不明	数棟	再建					
	慶長11年	安楽寿院多宝塔	B	1棟	再建	片桐且元		×藤原与右衛門尉宗久		天皇陵という性質上B方式と推測
		高台寺	不明	不明	修理	片桐貞隆				
		真正極楽寺本堂	不明	1棟	再建	片桐貞隆				
	慶長11年	石清水八幡宮	A	全棟	再建	小出吉正				
		醍醐寺西大門	A	数棟	再建	片桐且元	建部光重	△醍醐与三左衛門	△赤間五郎衛門	※3
		醍醐寺五大堂・如意輪堂	A	数棟	再建	片桐且元	建部光重	○源左衛門		
	慶長11年	醍醐寺開山堂	A	数棟	再建	片桐且元	伊藤則長	○源左衛門		
		等待院	不明	不明	再建	片桐且元				
		南禅寺法堂	B	1棟	再建	片桐貞隆	片桐貞隆	△清右衛門尉		
	慶長12年	北野経王堂	不明	1棟	再建					
		北野天満宮	A	全棟	再建	片桐且元	荒木勝太	○森田和泉守重次	△岩倉五郎左衛門	
		与軒神社	A	数棟	再建	片桐且元				
	慶長13年	鞍馬寺	不明	全棟	再建					
	慶長15年	由岐神社拝殿	B	1棟	再建	建部光重				彫刻に地方色量かでB方式と推測
	慶長18年	金戒光明寺御影堂	不明	数棟	再建	宮城豊盛				
		方広寺大仏殿	A	数棟	再建	片桐且元		中井大和守正清	中井五左衛門	公儀大工
摂津	慶長5年	四天王寺	不明	全棟	再建	浅野長政	小出秀政			
	慶長6年	猪名野神社	B	不明	再建	長照法印				
	慶長7年	須磨寺本堂	A	数棟	再建	片桐且元	津田恵閑	○五兵衛	○孫兵衛	
		金龍寺開山堂	不明	1棟	再建					
	慶長8年	須磨寺仁王門・鐘樓	A	数棟	再建	片桐且元	津田恵閑			
		總持寺	不明	全棟	再建	片桐且元				
		中山寺	A	全棟	再建	桑山重政	千賀清房	○藤右衛門		
	慶長9年	箕面寺本堂・六坊	不明	数棟	再建					
		玉造稲荷神社	不明	全棟	再建	片桐且元	伊藤則長			
		勝尾寺本堂	不明	1棟	再建			×藤原吉右衛門		
	慶長9年	本山寺	不明	全棟	再建					
		西宮神社表大門	不明	数棟	再建					
		呉服神社	A	全棟	再建	片桐且元	牧新介	○亀屋与左衛門正吉		
	慶長9年	伊居太神社	A	全棟	再建	片桐且元	牧新介	○亀屋与左衛門正吉		
		木津川橋	不明	1棟	再建					
		多田院	不明	全棟	再建	建部光重				
	慶長10年	七宮大明神社本殿	B	1棟	再建	片桐且元				『七宮大明神社記』よりB方式
	慶長11年	生国魂神社	不明	全棟	再建	片桐且元				
		淨土寺本堂	A	1棟	再建	片桐且元	荒木勝太	○和泉守		
		法安寺	不明	全棟	再建	片桐且元				
	慶長12年	住吉大社	A	全棟	再建	片桐且元	荒木勝太	○亀屋与左衛門	○藤右衛門	
		生根神社本殿・拝殿	A	数棟	再建	片桐且元				『住吉松葉大記』よりA方式
		住吉神宮寺	A	全棟	再建	片桐且元		○但馬守		
	慶長14年	西宮神社本殿	不明	数棟	再建	片桐且元				
	慶長18年	豊国神社	A	全棟	新築	片桐且元				秀頼創建のためA方式
河内	慶長6年	葛井寺四脚門	不明	全棟	再建	伊藤則長				
	慶長7年	片笠神社	A	全棟	再建	片桐且元	松山義長	○亀屋与左衛門正吉		
	慶長8年	叡福寺常光院・聖靈殿	不明	数棟	再建	伊藤則長				
		二宮神社	A	全棟	再建	片桐且元	松山義長	○亀屋与左衛門正吉		
	慶長9年	葛井寺	不明	全棟	再建					
	慶長9年	玉祖神社	不明	全棟	再建	片桐且元	小出秀政			
		枚岡神社	不明	全棟	再建	桑山重政				

地域	年	建築物名	方式	規模	工事	奉行1	奉行2	大工1	大工2	備考
河内	慶長11年	金剛寺	A	全棟	修理	片桐且元	吉田保好	○亀屋与左衛門正吉	○勝次郎 他	
		蕃田八幡宮	不明	全棟	再建	片桐且元	小出秀政			
	慶長18年	観心寺金堂	B	数棟	修理	片桐且元		△寺元五郎左衛門	△富田林五郎右衛門 他1名※4	
		常光寺	不明	全棟	再建	片桐且元				
	慶長19年	観心寺阿梨帝母天堂	B	数棟	葺替	片桐且元		△寺元五郎左衛門	△富田林五郎右衛門 他1名※4	
和泉	慶長7年	日根神社	B	全棟	再建	吉田一正		△藤原善十郎	△藤原善四郎 他24名※5	
		泉穴師神社	B	数棟	再建	片桐且元	藤枝定吉	△藤原次郎左衛門	△東喜左衛門 他3名※6	
		横川神社	B	不明	再建					彫刻、地方色豊かでありB方式と推測
		大島神社	不明	不明	再建					
		越前院	B	全棟	再建	吉田一正		△藤原善十郎	△藤原善四郎 他24名※5	
	慶長8年	松尾寺本堂	不明	1棟	移築	片桐且元				
		施福寺本堂	不明	1棟	再建	小出吉政	放士平八			
	慶長10年	五社総社	不明	不明	再建					
	慶長11年	聖神社	A	全棟	再建			○二左衛門		
大和	慶長6年	法華寺本堂・南門・鐘樓	A	数棟	再建	片桐且元				
	慶長8年	休岡八幡神社	A	全棟	再建	片桐且元	梅戸平右衛門	○喜多越後守清次	○喜多助作 他3名※7	
		勝手神社本殿	不明	1棟	再建					
	慶長9年	安禪寺蔵王堂	不明	1棟	再建					
		吉野山大橋	A	1棟	再建	建部光重				
	慶長10年	吉野水分神社	A	全棟	再建	建部光重		○藤原藤右衛門尉秀次	×藤原太郎右衛門尉宗次他16名※8	
		手向山八幡大塔	不明	1棟	再建	小出吉政				
		遠磨寺本堂・開山堂	不明	数棟	再建	片桐且元				
	慶長11年	法隆寺	B	全棟	修理	片桐且元	梅戸平右衛門	△中井大和守正清	△藤原宗右衛門宗次 他3名※9	
畿外	慶長3年	津島神社南門	B	1棟	再建	福島正則				津島神社文書よりB方式
	慶長5年	勧学院客殿	B	1棟	再建	毛利輝元				
		善光寺如来堂	不明	1棟	再建	安藤九助				
	慶長6年	慶光院客殿・庫裏・弁財天堂	不明	数棟	再建	片桐且元	稻葉道通			
		淨信寺本堂・五社明神社	不明	数棟	再建	片桐且元	雨森長介			
	慶長7年	都久夫須麻神社本殿	B	1棟	移築	片桐且元	雨森長介			
		石山寺	B	全棟	修理	片桐且元	青山茂右衛門	△田中石見守光久	△田中出雲守重次	
	慶長8年	宝蔵寺唐門・観音堂・渡廊	B	数棟	移築	片桐且元	雨森長介	△權守	△但馬守	
		白藏神社	A	全棟	再建	片桐且元	雨森長介	○藤原与三兵衛		
	慶長9年	青岸渡寺本堂	不明	1棟	修理	浅野幸長	小出吉政			
		延暦寺横川中堂	不明	1棟	再建	片桐貞隆				
		覆土橋姫神社本殿	不明	1棟	再建	雨森長介	安養寺善兵衛			
	慶長11年	総見寺三重塔他	不明	数棟	再建	織田有楽				
		熱田神宮寺	不明	数棟	再建	片桐且元				
		伊勢宇治橋	不明	1棟	再建	片桐且元				
	慶長12年	誓願寺	不明	全棟	再建					
	慶長14年	出雲大社本殿	A	数棟	再建	片桐且元	堀尾吉晴	○茶木久左衛門		
	慶長19年	熊野本宮大社	不明	全棟	再建	浅野幸長				

※1『義演准后日記』慶長五年四月十八日の条によると棟札に書かれたのは番匠が「石見守藤原宗安（醍醐与左衛門）」、棟梁は「伊賀守藤原宗重（醍醐与三左衛門）」興山上人大工の「土佐守藤原幸宗」「藤原宗清」である。

※2「藤井□□吉口」というのは慶長十年の観智院作事のときに大工棟梁として棟札に名を記す「藤井石見守吉次」のことであろう。彼は慶長七年時点でまだ22歳であり、慶長三年の講堂作事の際の墨書に「御奉行木食上人様なり。東寺東りうに申しつけられ、東りうしやく年にてべっけ与五郎つほかねにてたておさめ申候也。」とある若年の棟梁と考えられる。

※3『義演准后日記』に名前が出てくるのは醍醐寺大工である「伊賀（醍醐与三左衛門）」と三宝院大工の「長門（赤間五郎衛門）」であるが、指図等の相談のために奉行の大工が派遣され、作事は「大坂ニテ悉く木作」が行われているのでA方式である。

※4棟札によるとこれ以外に「太子勝右衛門」がいる。

※5造形記録木札によるとこれ以外に「長瀬 □□兵衛、同善左衛門、同善六、吉見助太夫、同助五郎、同助一、同助次郎、さの門道、同二郎左衛門、さの二郎右衛門、同平太郎、同善太郎、同左衛門、同源太郎、同源三郎、同善太郎、同左衛門二郎、ひねの長介、ひねの太郎右衛門、小木四郎衛門、同与十郎、大木四郎衛門、夕志口源三郎、同与介」がいる。

※6棟札によるとこれ以外に「藤原又市」「藤原与介」「東左近次郎」がいる。

※7棟札によるとこれ以外に「脇棟梁善右衛門」「肝煎弥四郎、源七郎」がいる。

※8棟札によるとこれ以外に「助右衛門尉家次、権太夫宗次、権太夫正家、善兵衛尉家次、権尉家次、新次郎、弥太郎、久三、久三郎、甚九郎、善四郎、喜介、太郎次良、太郎八、善三郎」がいる。また、墓股裏面墨書に「助作」。

※9棟札によるとこれ以外に「平金剛太夫政盛、藤原左太夫家次、平宗十郎」がいる。

(1606)の南禅寺法堂があげられる。作事奉行であった片桐且元、貞隆の書状⁴¹⁾によると大工棟梁は清右衛門尉と考えられる。清右衛門尉というのは南禅寺寺家大工の平松清右衛門のことで、材木の検分などすべて清右衛門が行っている。少なくとも前記書状からは秀頼側の大工の関与は認められない。

摂河泉では特に和泉においてB方式の作事が多い。文書史料はないが、慶長七年(1602)造営の積川神社には、泉南から和歌山にかけて分布する貝類や流水に筆を題材とした墓股彫刻があり、地元の大工が作事に当たったものと思われる。

同年造営の日根神社と神宮寺の慈眼院の大工は造営記録木札⁵⁾によって判明している。大工棟梁は長滝庄堂前の藤原善十郎、彫物はその一門の善四郎、彩色は中庄の多賀佐馬助、検皮大工は府(中)の善左衛門、鍛冶は日根野村の左衛門である。日根野は日根神社の所在地、長滝と中庄は日根野より海側、府中はやや離れるが現在の和泉市にある。その他24人の大工名が記載されていて、やはり長滝や日根野、佐野などすべて地元の大工である。さらに9人の杣大工も日根野と日根野より山側に位置する上郷の大工である。

同年造営の泉穴師神社は各時代の棟札がよく残っており、慶長度造営の大工も棟札⁶⁾によって知ることができる。奉行の藤枝与左衛門尉定吉は天津の郷土、大工の藤原次郎左衛門や又市、与助、東喜左衛門は、いずれも地元府中の住人である。

摂津・河内は大坂城下ということもあり、大工や諸職人まで派遣しているA方式が多い。例外のひとつに慶長十八年(1613)の観心寺金堂がある。棟札⁷⁾より棟梁大工は富田林五郎右衛門、大工は寺元五郎左衛門、太子勝右衛門と判明しているが、これらの大工はいずれも地元の大工であると考えられる。というのも観心寺の所在地は河内長野市寺元、また観心寺は富田林市との市境にある。太子勝右衛門の「太子」については、やや離れるが、富田林市を挟んで寺元の反対側に太子町がある。観心寺は金堂は修理、剎梨帝母天堂は屋根葺替と軽微な工事であり⁸⁾、第2次方広寺大仏殿造営中という事情も重なって地元の大工によって作事が行われたものであろう。

近江では、慶長七年(1602)造営の石山寺があげられる。『石山年代記』⁹⁾によると大工は田中石見守光久と弟の出雲守藤原重次である。彼等はそれぞれ石山と平津の住人であり地元の大工である。

慶長八年(1603)造営の宝蔵寺は棟札¹⁰⁾より大工は権守、小工は但馬守であることがわかるが、権守というのは竹生島の御大工、浅井郡富田村の阿部氏、但馬守は同じく富田村の西島氏のことであり¹¹⁾、地元の大工である。前年造営の都久夫須麻神社に携わったのも宝蔵寺同様、大工は権守、小工は但馬守であったと考えられる。

A方式の作事についてみると、大規模な寺社で寺家大工がいる時は共同作業となることが多い。そして、その関係は時々で異なる。例えば、醍醐寺金堂の場合は、寺家大工は応其の下での労働編成に組み入れられたにもかかわらず、形式的には棟札の最初に記されている¹²⁾。北野天満宮では門跡大工と松梅院大工の争いから上棟式の槌打ちは秀頼大工の森田和泉守重次が行い¹³⁾、棟札¹⁴⁾にも最初に名前が記されている。住吉大社では社家大工の宗兵衛と与兵衛がいるが、鉾始は秀頼派遣の大工の亀屋与左衛門が行っている¹⁵⁾。

また、権門寺社では数年にわたって伽藍が整備されることが多いが、同一寺院ではいつも同じ作事方式をとっていたというわけでは

ない。前述の醍醐寺の場合、秀吉、秀頼の二代にわたって再建されるが、『義演准后日記』によると慶長二年(1597)の秀吉による五重塔の修理は寺家大工の醍醐与左衛門と醍醐与三左衛門がおこなうB方式¹⁶⁾、慶長三年(1598)の北政所による三宝院造営も門跡大工で禁裏大工でもあった鍵屋三右衛門・彦右衛門と下代の赤間五郎衛門がおこなうB方式であった¹⁷⁾。しかし、金堂は「上人大工」の藤原幸宗、宗清を中心として寺家大工の醍醐与左衛門と醍醐与三左衛門も加わったA方式¹⁸⁾、さらに慶長十一年(1606)の山上伽藍では、「奉行ノ大工」源左衛門を中心としたA方式である¹⁹⁾。園城寺でも慶長四年(1599)の金堂はA方式であったが²⁰⁾、翌五年(1600)の勧学院客殿は寺家大工が作事に当たった可能性があり²¹⁾ そうであればB方式であった。

秀頼の寺社造営における作事方式を検討した結果、多くの場合、奉行による積極的な動員が行われるA方式であるが、それ以外にB方式が広範囲に存在していることがわかる。さらにA方式の場合でも大規模作事の時は寺家大工との共同作事となっている。このことは秀頼の作事体制の限界を窺わせるものであるといえよう。

3. 秀頼の寺社造営における棟梁

次に記録類から秀頼側から派遣されたと判明している大工について検討する。この場合、作事方式はA方式である。

亀屋与左衛門 造営件数が最も多いのは亀屋与左衛門である。慶長七年(1602)の片莚神社と慶長八年(1603)の二宮神社では総奉行片桐且元、奉行松山義長、富田盛次の下で作事にあたり²²⁾、続く慶長九年(1604)の伊居太神社と呉服神社では総奉行片桐且元、奉行牧新介、藤林与左衛門守吉の下で作事に当たっている²³⁾。いずれの場合も本殿ばかりでなく拝殿、築地、鳥居、門、摂社、神饌所、社務所等境内全体の社殿を造営している。

また、それらの作事と相前後して始められ、慶長十一年(1606)まで続く金剛寺全域の改修工事にも携わっている。楼門の東南隅木墨書に「大阪住人 亀屋与左衛門之内ノ勝治郎貳拾壹歳合作之也相番匠ノ同与三五郎同久次郎也ノ高向勝次郎ノ口時慶長拾年九月廿八日正吉(荒押)」とあり²⁴⁾、亀屋与左衛門が関与していたことがわかる。その時の作事の内容は、金堂、多宝塔、食堂、鐘楼、楼門は解体修理、御影堂並びに観月亭、薬師堂、五仏堂は旧材も転用した再建、摩尼院、北門、南門、閼伽井屋、法具蔵、護摩堂、鎮守社の丹生高野明神社と水分明神社は新造である²⁵⁾。多宝塔は心柱墨書に「御大工源丞 梶藤右衛門 森島喜三郎 脇大工与右衛門 林口三郎 森口蔵」とあり²⁶⁾、御大工源丞は寺家大工と思われるが、脇大工与右衛門は後に述べる住吉大社作事にあたる亀屋与右衛門の可能性もある²⁷⁾。このほか食堂の軒唐破風下に牡丹唐草の墓股があるが、この牡丹は片莚神社本殿身舎の牡丹とほぼ同じ形状であり、食堂の修理も亀屋与左衛門とその一門が当たったと思われる。いずれにせよ、規模が大きかったこともあり、金剛寺では寺家大工との共同作業であったようである。

『住吉松葉大記』²⁸⁾によると、与左衛門は、同年十月には総奉行片桐且元、奉行吉田次左衛門、片桐貞隆の下で住吉大社の造営に当たる。本殿は葺替、西大鳥居は修理であったが、西大門、南大門、神輿舎、神馬屋、幣殿、楽屋、御旅所、石舞台、神樂所、北、南東

の大鳥居、廻廊、高倉、浄土寺の本堂、庫裏、神宮寺の東西の塔、東西南北それぞれの門、築地、常行三昧堂法華三昧堂、僧坊を再建するという大規模なものであった。「泉州堺亀屋与左衛門、与右衛門」が大工棟梁で、新始は当社の「総大工」宗兵衛と「権大工」与兵衛がいるにもかかわらず、秀頼の造営ゆえ亀屋与左衛門が行っている。与左衛門と共に記される与右衛門はおそらく与左衛門の息子が弟と考えられる。

慶長八年(1603)から立て続けに亀屋与左衛門は寺社の造営を行っているが、与左衛門には多くの配下の大工がいて、数多くの寺社造営をこなす能力があったと思われる。現存しているのは片埜神社本殿、南門、金剛寺食堂、楼門、住吉大社南大門、楽所、石舞台のみである。片埜神社本殿は建築彫刻は堅実であるが、当時南大阪で流行していた二重虹梁大瓶束を妻組に取り入れ華やかである。金剛寺の改修においては構造的な補強ばかりでなく、食堂では風化した柱表面を削り直したり内外を回転させたり意匠にも配慮した修理をしている²⁹⁾。このような部分に亀屋の特性が見い出される。また、与左衛門ではないが、広島県三原市にある米山寺の天正四年(1576)の再興棟札³⁰⁾には「大檀那小早川隆景」、大工が「甚野氏亀屋新四郎」と記されている。「大工従泉州南堺撰迎拔萃匠工」と記され、亀屋一門が当時名の通った大工であったことがわかる。しかし、後の大坂の大工組にも中井配下にも亀屋姓の大工を見い出すことはできない。

源左衛門 醍醐寺山上伽藍の作事に当たった源左衛門は、『義演准后日記』によると大仏十人棟梁の一人であるという³¹⁾。その出自は不明で紀伊出身か大和出身かはわからないが、方広寺大仏殿造営の時に応其によって連れて来られた工匠の一人であることは間違いない。また、『慶長日件録』にその名が頻出する大工源左衛門と同一人物であるなら、舟橋秀賢の被官大工でもあった³²⁾。

醍醐寺の山上伽藍はすべて大坂で木造をして、現地では「取合計」であった³³⁾というから一種のプレファブリケーションというべき工法がこの時点ですでに確立し、これが作事の迅速化を生み出していたことがわかる。このように寺家大工や社家大工に比べ、「上人大工」「奉行の大工」「秀頼様御大工」は建築生産方法と設計能力に優れていた³⁴⁾。

源左衛門が秀頼造営の寺社に関する史料に名前を残すのは醍醐寺山上伽藍だけであるが、『慶長日件録』慶長十二年十月二十五日の条に、「大工源左衛門、自駿河歸、」とあり、駿府城作事に参加したものと思われる。また、源左衛門は慶長十八年(1613)の慶長度内裏造営の時中井正清配下の棟梁として名前が見え³⁵⁾、元和五年(1619)の女御御殿造営にも同じく名前が見える³⁶⁾。

和泉守・但馬守 慶長十二年(1607)の住吉大社作事で亀屋与左衛門らとともに参加している大工に和泉守と但馬守がいる³⁷⁾。和泉守は浄土寺本堂、但馬守は神宮寺の西塔と両三昧堂を担当している。東塔は亀屋与左衛門の担当であり、和泉守・但馬守は、秀頼造営寺社を数多く手がけている亀屋与左衛門に並ぶような実力を持っていた大工であったと考えられる。当時、貝塚の願泉寺を本拠とする願泉寺大工は優れた大工集団として有名であったが、その棟梁である岸上氏に但馬守、和泉守という受領名を持つ岸上定吉、貞由兄弟がいる³⁸⁾。住吉大社作事に従事したのは彼等であったと思われる。

願泉寺大工集団が秀頼造営の寺社に関わった例は、他に慶長九年(1604)の聖神社造営があげられる。聖神社は本殿や宮殿から「泉州南郡海塚の御坊大工衆」「泉州南郡海塚御坊町大工二左衛門」という墨書が発見されているが³⁹⁾、「海(貝)塚御坊」というのは、一時本願寺でもあった願泉寺のことである。また、末社三神社から「河内国茨田郡十七ヶ所 二兵衛作」、末社滝神社から「山城国〇〇郡下京住人口兵衛是於才敷也」という墨書が発見されており⁴⁰⁾A方式の作事であったとわかる。A方式であれば御坊大工衆、いわゆる願泉寺大工集団の棟梁であった岸上但馬守定吉、岸上和泉守貞由が作事に参加している可能性はたいへん高いと言えよう。

和泉守が造営に携わった建築物としては他に寛文三年(1663)の願泉寺本堂が知られているが⁴¹⁾、17世紀後半の建築であるにもかかわらず、構造は古式を守り、彫刻も古式で、藝彫彫刻も輪郭からはみ出さず彫刻にも崩れがみられない。もともと願泉寺大工は彫刻技術の高さで知られ、聖神社にもそれが窺われる。

喜多越後守清次 喜多越後守清次は、慶長八年(1603)の休岡八幡神社作事に棟梁として子息助作や脇棟梁善右衛門らと共に携わっており、棟札には「五条村大工座之随一也」とある⁴²⁾。五条村は薬師寺領の中でも一番大きな集落で、多くの薬師寺番匠が住んでいた⁴³⁾ことから、清次も元は薬師寺大工であったと思われる。

清次も源左衛門と同じく、慶長度内裏作事において「大仏 喜多越後」と中井配下の棟梁として名前を見ることができる⁴⁴⁾。共に名前のある「大仏 助作」はあるいは休岡八幡神社棟札にある子息助作かもしれない。慶長度内裏では全殿舎を10の丁場にわけ、それぞれに奉行を配し、その下に数人づつの棟梁をつかせ、さらに頭棟梁格の者を2、3名加えて作事に当たらせている⁴⁵⁾。この10丁場のうち喜多越後は8丁場までその任に当たり、内裏の大部分の工事を実際に行ったと思われる。喜多越後以外の頭棟梁は西里村の辻本若狭、東里村の金蔵など法隆寺大工で、彼等は早くから中井配下の棟梁であったと思われ、そのなかで頭棟梁の一人となった喜多越後が如何に技術的に優れていたかの証左となろう。

元和五年(1619)の慶長度内裏女御御殿作事には、大仏越後として9人の弟子を連れて参加しているが、「大工日数寄帳」⁴⁶⁾によるとすべての大工のなかで最高の一丁8升の給米を受けている。

森田和泉守重次 前述したように、慶長十二年(1607)の北野天満宮作事の棟梁である。「慶長十二年造営遷宮記録」⁴⁷⁾に

一、同十三日、御社頭ノ棟上有、此間大工五郎左衛門と又弁慶と公事有之いへ共両方へ落不付して、秀頼様御大工和泉といふ大工つちをうつ也、(以下略)

とあり、「秀頼様御大工」と記されている。しかし、森田和泉守重次は、北野天満宮以外の史料にその名を見い出すことはできない。『北野社家日記』慶長十七年十月九日の条⁴⁸⁾に

一、(略)柱何かさうさ共、秀頼様御大工泉と申仁又八御さうくろノ奉行あら木勝太申仁兩人より皆さうさ被仕候、

と、再び「秀頼様御大工泉」という記述が見えるので、少なくとも慶長十七年(1612)の時点までは秀頼の御大工の一人であったことは確かである。

藤右衛門 秀頼が造営した寺社の棟札に藤右衛門という名がみえるのは、慶長八年(1603)の中山寺棟札⁴⁹⁾の「御大工 藤右衛門」と

慶長十年(1605)の吉野水分神社の棟札⁵⁰⁾の「法隆寺／御大工藤右衛門尉秀次藤原朝臣」である。このうち、吉野水分神社の棟札の藤右衛門を、「御大工」「藤右衛門」とあることから中井正清とする意見がある⁵¹⁾。しかし、「正清」でなく「秀次」であり、棟札に「御大工」と記されるのは正清ばかりではない。さらに、正清が棟梁を勤めたことが明らかである、慶長十一年(1606)の法隆寺東院伝法堂の棟札⁵²⁾には「一朝惣棟梁 橋朝臣中井大和守正清」とあり、正清は藤原姓を名乗っていない。『中井家系譜』⁵³⁾にも中井家は巨勢・橘姓であると記されている。従って正清以外に藤右衛門を名乗る法隆寺大工がいたと考えたほうが妥当であろう。

また、記録類にも藤右衛門という名が散見できる。『北野社家日記』慶長十二年(1607)八月六日の条には「片市殿大工とうりやう藤右衛門」が登場する⁵⁴⁾。これを中井正清だとする考え方もあるが⁵⁵⁾、正清が「藤右衛門」を称するのは大和守受領までで、大和守を受領するのが慶長十一年(1606)七月十三日であり⁵⁶⁾、官位官職に敏感な北野天満宮の松梅院禅昌が1年以上もたつのにその事実を知らないのは不自然である。さらに、「片市殿大工とうりやう藤右衛門」が北野天満宮を訪れたという日に正清は京にはいなかった⁵⁷⁾。すなわち『北野社家日記』慶長十二年八月六日の条に

今夜片市殿とうりやう藤右衛門来、かり殿さしつ松梅院次第二仕候へと被仰付、荒木勝太方 状有、かり殿ハ法花堂二後用ことく二申付也、

とあり夜に藤右衛門が上洛し、翌七日には

今日かり殿さしつ究候て大工下申候、

と七日に帰ったことがわかる。しかし、慶長十二年八月八日付の中井正清の 松梅院にあてた書状⁵⁸⁾に

如仰下国仕候砌、不能拝顔候、(中略)何様懸而罷登可得其意候

とあるので藤右衛門が中井正清でないのは明らかである。もちろんこの書状の差出人は「中井大和守」である。

さらに、住吉大社造営に関して『住吉松葉大記』に出てくる藤右衛門も、この記録が元禄年間(1694-1704)の成立であり、和泉守と但馬守が受領名で記されていること⁵⁹⁾、造営の日付が慶長十二年(1607)二月十日と三月二十一日と、正清の大和守受領後であることから中井正清ではないと考えられる。

このほか、内藤昌氏と渡辺勝彦氏が新出史料として紹介された「御配当半分御取替之事」⁶⁰⁾に載る「御大工 藤右衛門」も、中山寺棟札の「御大工 藤右衛門」とともに、後述するように中井正清が豊臣氏との関係が薄いとすれば、秀次の可能性が高い。これらの藤右衛門がすべて吉野水分神社の棟札に書かれる藤右衛門尉秀次であれば、藤右衛門秀次は、秀頼の作事組織にとって重要な大工の一人であったことになる。

以上A方式の場合、比較的小規模の作事では、複数の大工がそれぞれの工集団をひきいて、個別に棟梁を勤めていた。そして、大規模作事では、一つ一つの大工集団の規模があまり大きくないためか、共同で作事にあたっていることがわかる。さらに、それらの大工を運営上統括したのは片桐且元であるが、正清のような御大工頭は存在しなかったことも窺える。

4. 秀頼の作事組織

豊臣秀頼の作事組織が、初期においては秀吉の作り上げた組織をそのまま受け継いだであろうことは間違いない。では、秀吉の作事組織とは如何なるものであったのか。秀吉は城郭作事では、安土城の手伝い普請の時、職人を三交代で作事に当たらせ効率化をはかったり⁶¹⁾、聚楽第造営の時にはそれぞれの殿舎ごとに奉行、棟梁、大工を決めて工事の組織化と迅速化をはかったりしている⁶²⁾。伏見城に関する記録はないが、肥前名護屋城でも殿舎ごとに担当奉行を決めて割普請を行っている⁶³⁾。しかし、大工に関しては恒常的な組織があったのか、作事ごとに組織されていたのかは全くわかっていない。天正十四年(1586)時点で秀吉に「殿下之御大工右衛門尉」がいたことが判明しているが⁶⁴⁾、彼がどのような役割をはたしていたのかは明らかではない。そのような中、少なくとも秀吉の寺社作事の統括者が応其であったことは確かである。勸進聖である応其は、数多くの高野衆や各地から集めた何百人もの大工をひきいて、方広寺大仏殿ばかりではなく、洛中洛外の寺社の大規模造営・整備に当たった⁶⁵⁾。「大仏大工」「上人人工」などと称する彼等は応其を中心とした統一的組織であったと思われる、豊臣政権の行政機構のなかに完全に組み込まれていたわけではないが、実質上、寺社造営における豊臣家の作事組織として機能していたと考えられる。

しかし、これまでみてきたように、秀頼の寺社再興において、A方式以外に寺家大工や地元の大工によるB方式の作事が広範囲に存在している。また、秀頼側の大工が作事を行う場合でも、複数の大工が個別に棟梁を勤めていて、それらの大工棟梁には明確な上下関係は認められず、並列関係にあったと思われる。この様に作事組織が変化した背景としてはさまざまな要因が考えられる。

秀頼にとってごく初期のA方式の作事である豊国廟と醍醐寺金堂造営では、応其が高野衆とともに作事の監理を行っている。おそらくは、慶長五年(1600)の関ヶ原の戦いまでは秀吉の作事組織がそのまま機能していたに違いない。しかし、関ヶ原の戦いの後、責任を家康に問われて応其は隠遁する。その後を文殊院勢眷が引き継ぎ、慶長十一年(1606)の南禅寺法堂作事まで秀頼の寺社造営に関与はするが⁶⁶⁾、実際造営に奉行としてかかわったのは東寺金堂と南大門のみである。秀吉の死後、豊臣政権が大きく弱体化するのは、政治的には豊臣政権自体の構造的矛盾、集権派と分権派の対立などが指摘されているが⁶⁷⁾、豊臣政権が秀吉と諸大名の個別的関係という基盤の上に立脚していたこともその原因の一つであろう。同様に、少なくとも秀吉の寺社造営における作事組織は、秀吉と応其という天正十三年(1585)の高野攻め以降密接に続いた関係に依拠していたが為に、秀吉の死と応其の隠遁で事実上解体してしまうのである。しかし、寺社造営における作事組織のみが秀吉の作事組織であったわけではなく、それだけでは豊臣家の作事組織の変質の理由とはならない。

秀頼と秀吉の造営した建築物には大きな相違点がある。秀吉が大坂城、肥前名護屋城、伏見城、聚楽第など次々に造営したのに対し、秀頼は城郭の造営を一度も行っていない。寺社においても、秀吉が、方広寺を初め祥雲寺、天瑞寺、青巖寺と寺院を創建したのに比べ、秀頼は、豊国廟、法国寺、大坂豊国神社以外はすべて再興、または修理である。これらの違いが生まれた背景のひとつとして、

豊臣氏のおかれた政治的立場を看過することはできないだろう。関ヶ原の戦い以降、豊臣家は事実上摂河泉65万石の一大名になってしまう。そして「公儀」の実権は家康に移る。慶長九年頃から慶長十一年(1606)まで続く金剛寺作事では、豊後や薩摩から職人を多数動員して⁶⁸⁾、依然西国大名に対しては大きな影響力を持っていたと思われるが、慶長十一年の江戸城作事で初めて秀頼領から、片桐且元を介してではあるが国役動員がかけられる⁶⁹⁾。秀吉の場合は城郭にしても寺社にしても一からの造営であった為、大量の職人の投入を必要とした。しかし、秀頼の行った寺社再興では、奉行と大工を派遣するA方式の作事の場合でも、権門寺社には寺家大工が存在していて、ほとんどが共同作業となっている。これは豊臣領以外からの普請役の動員力の低下と無関係ではないと思われる。

秀頼の再興する寺社が急に減少するのは慶長十三、四年以降である。慶長十六年(1611)にはいわゆる二条城会見が行われ、秀頼は徳川氏に対して臣下の礼をとる。続いて禁裏造営という大義名分の下に秀頼の家臣も含めた諸大名に普請が課され、ここに徳川幕府という、秀吉の「公儀」に依拠しない、新しい権威による国役動員体制が確立する⁷⁰⁾。さらに、この時点で秀頼の作事に大きな役割を果たしてきた源左衛門、喜多越後守清次の両名を配下に行っているなど、中井正清の五畿内近江六ヶ国の大工支配も着々と進んでいた。そしてそのような状況下、豊臣家の作事であるにもかかわらず、第2次方広寺大仏殿は中井正清を棟梁として進められるのである。

従来『摂陽奇観』⁷¹⁾『真書太閤記』⁷²⁾に大坂城の棟梁が中井正清であるとする、豊臣氏大坂城の指図が中井家から見つかったことから中井正吉が大坂城築城に大きな役割を果たし、『愚子見記』⁷³⁾の記述より方広寺大仏殿造営では正吉が「棟梁司」であった、故に正吉は豊臣氏に仕えていたと考えられてきた。さらに、正清も最初は父とともに豊臣氏に仕え、秀頼の作事にもかかわってきたと考えられてきた⁷⁴⁾。正吉が大坂城作事の御大工であったことを否定するものではないが、秀吉期の1次史料にまったく正吉の名を見い出せないのは事実であり、天正度方広寺大仏殿作事で後の江戸幕府作事における正清のような役割を担っていたのは応其である⁷⁵⁾。

正清が豊臣家の御大工であったという1次史料はなく、少なくとも秀頼期の豊臣氏とはそれほど深い関係はなかったのではないだろうか。中山寺、吉野水分神社、住吉大社、北野天満宮の藤右衛門を秀次だとすると、正清が秀頼の作事に関与したのは法隆寺大修理と慶長度方広寺大仏殿だけとなる⁷⁶⁾。法隆寺大修理は法隆寺大工を束ねる棟梁として当然の人選である。慶長十一年(1606)八月の法隆寺棟札⁷⁷⁾の「一朝惣棟梁」という文字には、徳川氏の御大工頭であった正清が、まだ権威の残存していた豊臣氏からも棟梁として作事を任せられ、しかもこれに先立つ七月十三日には従五位下大和守に叙任されたという正清の得意の絶頂を見ることができる。

また、方広寺大仏殿作事に正清が当たったのは、秀頼の作事体制に問題があったことも一因ではないか。見てきたように秀頼の作事組織には、大規模造営には不可欠である応其のような作事編成能力を持った人物が存在しなかった。さらに広域動員、および全国からの資材の調達に困難になり、大仏殿という巨大な建築物を建造するための構造技術を持った大工がいなかったと考えられる。徳川幕府御大工頭の中井正清が方広寺大仏殿作事の棟梁を勤めたのは、家康の思惑⁷⁸⁾があったのは言うまでもないが、豊臣氏と中井正清の個人

的な結び付きからではなく、広域動員体制を掌握し、優秀な技術陣を多く抱えていた徳川幕府の大工である正清にしかできない作事だったからではないだろうか。このように慶長期後半には豊臣氏の組織は脆弱化し、方広寺大仏殿は幕府の作事組織に頼らなければ造営できなかったのである。

5. おわりに

秀吉の死後豊臣氏の政治的立場は大きく変化していく。それとともに秀頼の再興する寺社は変化し、秀吉から受け継いだはずの作事組織も変質を余儀なくされる。おそらくは100を超える多くの寺社を再興したにもかかわらず、その作事体制には限界が窺え、それどころか、秀頼の作事組織が組織として十分に機能していたかという疑問が残る。

当然のことながら、秀頼の寺社造営を支えた大工は技術的にも均一ではなく、これら雑多なエネルギーが秀頼の寺社作事の原動力でもあった。これは中井正清という一人の傑出した人物の下、組織化され安定した技術力を保持し、一定のレベルの建築を次々と造り出して行った徳川幕府の作事組織とは大きく異なる。しかし、逆に一元化されなかったことが、秀頼の造営寺社における建築および建築彫刻の多様性を生む。各地の東照宮のように徳川家造営の寺社の建築彫刻が定型化に陥ったのに比べ、17年という短い間であったが、多様性を誇る秀頼造営寺社の建築彫刻は、桃山建築彫刻の中でもひとときわ光彩を放つものであるといえよう。この秀頼造営寺社における建築彫刻の問題については次稿に譲りたい。

謝辞

本研究に際し、京都橘女子大学教授横田冬彦氏と神戸大学工学部助教授黒田龍二氏に多くのご教示を賜わった。記して感謝の意を表する次第である。

【註】

- 1) 政治史では天正元年(1573)から慶長五年(1600)までを桃山時代とするが、ここでは建築史及び美術史の区分に従い、下限を元和元年(1615)とした。
- 2) 拙稿「豊臣秀頼の寺社造営について」(『日本建築学会論文報告集』第499号 1997年)
- 3) 横田冬彦「近世都市と職人集団」(『日本都市史入門Ⅲ 人』東京大学出版会 1990年)
- 4) 桜井景雄・藤井学共編『南禅寺文書 中巻』(南禅寺宗務本所 1974年) 333号、335号、343号 片桐貞隆書状、339号、340号 片桐且元書状等
- 5) 鈴木武雄『大井堰御坊慈眼院』(大井堰御坊慈眼院寺務所 1984年) 大井関大明神慶長造営記録木札
- 6) 『重要文化財泉六師神社々殿修理工事報告書』1958年
- 7) 『国宝観心寺金堂・重要文化財建掛塔修理工事報告書』1984年
- 8) 前掲註7)
- 9) 『石山寺多宝塔修理要録』所掲
- 10) 『国宝都久夫須麻神社修理工事報告書』1937年
- 11) 『東浅井郡志 巻3』雑誌第2編第4章第4節、『東浅井郡志 巻4』古文書志第1編内採集文書 阿部文書、1927年
- 12) 『義演准后日記』(『史料集纂』古記録編 1984年) 慶長五年四月十八日の条
- 13) 『北野天満宮史料・古文書』(北野天満宮史料刊行会 1978年) 慶長十二年造営遷宮記録
- 14) 李正夫「片桐且元と慶長の修理」(『月刊文化財』151号 1978年)、藤井直正「豊臣秀頼の寺社造営とその遺構」(『大手前女子大学論集』17集 1983年) 所掲

- 15) 『住吉松葉大記』(復刻版 皇学館大学出版部 1984年)巻第21 造営部 慶長十一年の条
- 16) もっとも、この五重塔作事は、当初は応其が直接作事に当たるA方式の予定であったが、大仏殿作事と重なり、やむなくB方式に変更。最後には、秀吉の花見のために再度A方式に変更して竣工する。『義演准后日記』(『史料纂集』古記録編 1984年)慶長二年二月十七日、六月五日、十一月十日、十二月二十七日、慶長三年一月五日、二月九日、二月二十九日の条など。
- 17) 『義演准后日記』(『史料纂集』古記録編 1984年)慶長三年九月二十四日、十月四日、慶長五年一月四日、慶長六年十二月二十五日の条など。
- 18) 『義演准后日記』(『史料纂集』古記録編 1984年)慶長三年四月二十七日、五月十九日、慶長五年三月六日、三月九日、三月十一日、三月二十二日、四月十八日の条など。
- 19) 『義演准后日記』(『大日本史料』慶長十一年六月二十四日)慶長十一年十月朔日、同年十一月九日の条など。
- 20) 金堂の東北隅木墨書に「此角ヨリ西南大工棟梁但馬国住人藤原助左衛門大和国□□大納言秀長御大工也」とあり、秀長御大工の関与が認められる。(文化庁監修『国宝14 建造物Ⅱ』1984年 所掲)
- 21) 翌慶長六年に山岡道阿弥によって建てられた光浄院客殿と外観、平面ともたいへん似ていることはよく知られているが、再興者が異なるのに共通しているというのは共に寺家大工が手がけた可能性がある。
- 22) 片埜神社、二宮神社とも棟札が現存している。(『大阪府神社文化財目録』大阪府神社庁 1981年、『特別展 豊臣秀頼展』大阪城天守閣 1993年、所掲)
- 23) 伊居太神社、呉服神社とも棟札が現存している。(『池田市史 史料編 ①原始・古代・中世』1967年 所掲)
- 24) 『重要文化財金剛寺食堂修理工事報告書』1955年、『大阪府の近世寺社建築—近世寺社建築緊急調査報告書』(大阪府教育委員会文化財保護課 1987年)
- 25) 『重要文化財金剛寺食堂修理工事報告書』1955年
- 26) 前掲註25)
- 27) 前掲註15)
- 28) 梅園惟朝著、元禄(1688～1704)ごろ成立か
以下住吉大社作事については『住吉松葉大記』(復刻版 皇学館大学出版部 1984年)巻第21 造営部 慶長十一年の条による。
- 29) 前掲註25)
- 30) 『棟札銘文集成—中国・四国・九州編—』(国立歴史民族博物館 1993年)
- 31) 『義演准后日記』(『大日本史料』慶長十一年六月二十四日)慶長十一年十一月九日の条
九日、陰、番匠源左衛門来、山上三伽藍、此番匠地ワリ等仕之、大仏十人棟梁之中也、
- 32) 『慶長日件録』(『日本古典全集』日本古典全集刊行会 1939年、『史料纂集』古記録編 1981年)慶長八年十一月十九日の条
大工源左衛門予也抜官分二可成由、令契約来、樽両種進之、内義へ折進之、向後可令奉公云々、
- 33) 『義演准后日記』(『大日本史料』慶長十一年六月二十四日)慶長十一年十月一日の条
- 34) 前掲註3)
- 35) 吉田純一・平井聖「慶長～元和期における中井正清配下の棟梁」(『日本建築学会論文報告集』第333号 1983年)
- 36) 『元和五年正月ヨリ六月迄 禁中女御様御作事仕大工日数寄帳 大仏伏見 東福寺 山城』(宮内庁書陵部)
- 37) 前掲註15)
- 38) 『貝塚彫物大工由緒書』[願泉寺文書1000号] (願泉寺蔵 天保十一年(1840)以前成立か)
- 39) 『国宝聖神社本殿修理工事報告書』1938年
- 40) 『重要文化財聖神社末社三神社滝神社修理工事報告書』1979年
- 41) 『了観師記 万記録』(『日本都市生活史料集成9 門 前町篇』学習研究社 1977年)ト半了観著、延享三年(1744)成立
- 42) 『奈良県史 第17巻 金石文(下)』1987年
- 43) 大河直躬『番匠』(法政大学出版局 1971年)第10章
- 44) 前掲註35)
- 45) 平井聖・鈴木解雄「江戸時代における京都御所造営史概説—Ⅰ(慶長度禁裏造営における造営組織について)」(『日本建築学会研究報告』第43号 1957年)
- 46) 前掲註36)
- 47) 『北野天満宮史料・古文書』(北野天満宮史料刊行会 1978年)
- 48) 『北野社家日記』第六(『史料纂集』古記録編 1973年)
- 49) 『宝塚市史 第5巻 資料編Ⅱ』1978年
- 50) 『重要文化財吉野水分神社拝殿弊殿修理工事報告書』1976年、『重要文化財吉野水分神社楼門・廻廊修理工事報告書』1987年、所掲
- 51) 細見啓三「大和における近世大工の動向」(『奈良県の近世寺社建築』奈良県教育委員会文化財保護課 1987年 所収)
- 52) 『日本建築史基礎資料集成4 仏堂Ⅰ』(中央公論美術出版 1981年)
- 53) 城戸久解題『中井家系譜』(私家版 1951年)
- 54) 「片市殿大工とうりやう」を文字どおり、片桐且元の被官大工とすることもできるが、ここでは奉行派遣の大工と解釈したほうが妥当であると思われる。
- 55) 平井聖「中井家と中井家文書」(『中井家文書の研究1』中央公論美術出版 1976年)
- 56) 前掲註53)
- 57) 横田冬彦「中井正清の居所と行動」(『近世前期政治的主要人物の居所と行動』京都大学人文科学研究所調査報告 第37号 1994年)
- 58) 『北野天満宮史料・古文書』(北野天満宮史料刊行会 1978年)179号 中井正清書状
- 59) 前掲註15)
また、『貝塚大工之由緒書』(願泉寺蔵)によると、但馬、和泉は直江山城守の高野山金剛峰寺の小塔再興の折に大覚寺宮から受領したものであるという。金剛峰寺の小塔再興がいつなのかはわからないが、上杉景勝の家臣である直江山城守兼続が死去するのは元和五年(1619)なのでそれ以前と考えられる。
- 60) 内藤昌・渡辺勝彦「豊臣家御大工藤右衛門について」(『日本建築学会大会学術講演梗概集』1984年)
なお、同じく「御配当半分御取替之事」に載る「御大工与左衛門」は亀屋与左衛門の可能性もある。
- 61) 天正五年六月五日付豊臣秀吉自筆書状(『特別展 戦国の五十人』大阪城天守閣 1994年 所掲)
- 62) 天正十四年十月二十二日付豊臣秀吉朱印状(『特別展戦国の五十人』大阪城天守閣 1994年 所掲)
- 63) 内藤昌「肥前名護屋城図屏風」の建築的考察(『国華』915 1968年)
- 64) 『兼見卿記』(東京大学史料編纂所蔵)天正十四年八月二十四日の条
- 65) 『高野山文書』(『大日本古文書』家わけ第一)491号 諸寺諸社造営目録
- 66) 桜井景雄・藤井学共編『南禅寺文書 中巻』(南禅寺宗務本所 1974年)341、342号 文殊院勢誓書状
- 67) 朝尾直弘『將軍権力の創出』(岩波書店 1994年)
- 68) 前掲註25)
- 69) 高橋正彦編『大工頭中井家文書』(史学39 1967年) 大久保長安・本多正純連署書状
- 70) 高木昭作「江戸幕府の成立」(岩波講座『日本歴史9 近世1』岩波書店 1975年)
- 71) 浜松歌国著、文政10年(1827)ごろ成立か
- 72) 栗原信充著、12編36巻、嘉永以降順次刊、明治17年(1884)完成。
- 73) 今奥政隆著、寛文11年(1671)～貞享元年(1684)成立
(復刻版 井上書店 1989年)
- 74) 内藤昌「近世大工の系譜」(べりかん社 1981年)、渡辺勝彦「城郭と内裏の造営」(『講座日本技術の社会史 第7巻 建築』日本評論社 1983年)
- 75) 横田冬彦「中井正清—棟梁たちをひきいた大工頭」(『講座 日本技術の社会史 別巻1 人物編 近世』日本評論社 1986年)
- 76) 辻善之助氏は中井正清がかかわった相国寺山門を豊臣秀頼の造営とするが(辻善之助『日本仏教史 近世編之二』岩波書店 1953年)、「西笑和尚文案」(『大日本史料』慶長十一年二月十五日)によると徳川家康の造営である。
- 77) 前掲註52)
- 78) 中井正清が「公儀の大工」として大仏殿再建を行うことにより豊臣体制の残存していた鑄物師や大仏大工をその元に完全に編成し幕府の職人掌握を進めようとした。(前掲註3)、高木昭作「幕藩初期の身分と国役」『歴史学研究』別冊1976年)

(1998年1月10日原稿受理、1998年3月16日採用決定)